



Title	デンマーク領西インド諸島における奴隷解放(1848年) について
Author(s)	佐保, 吉一
Citation	IDUN. 2003, 15, p. 247-274
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/96450
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デンマーク領西インド諸島における 奴隷解放（1848 年）について

佐保 吉一

1. はじめに

カリブ海北東部の小アンティル諸島北端に位置するセント・トーマス (St. Thomas) 島¹ は、現在、アメリカ合衆国保護領で大型クルーズ船が頻繁に訪れるフリーポートでもある。この島は近隣のセント・クロイ (St. Croix) 島²、セント・ジョン (St. John) 島³ と併せて 1917 年までデンマークの海外領土であり、デンマーク本国からは統治のために総督と軍隊が派遣されていた。デンマークによるこれらの島の領有は 17 世紀に遡る。当時のデンマークは他のヨーロッパ諸国と同様、重商主義政策をとり、より多くの富を求めて海外に進出していた。特にクリスチャン 4 世時代 (1588-1648) にその重商主義政策が顕著であった。具体的にはアイスランド会社 (1602)、東インド会社 (1616)、グリーンランド交易会社 (1619) 等の貿易会社が設立され、それらを通じて積極的な海外進出が図られた。その活動範囲はアフリカをはじめインド、西インド (カリブ海) にまで及び、貿易拠点や植民地を築いたのであった。⁴ 特に西インド方面においては、1670 年にサンクト・トーマス島の統治権を獲得し、続いて 1718 年にはサンクト・ヤン島を併合した。さらに、1733 年にはそれまでで最も大きなサンクト・クロイス島をフランスから購入した。約 200 年間に渡るデンマーク統治下、これらの島では黒人奴隷を労働力とする砂糖キビプランテーションが展開し、本国経済を支えた。また、このデンマーク統治下において、世界史上意義ある政策も実施されている。それは 1792 年、世界に先駆けて公布された「奴隷貿易廃止勅令」で、12 年間の移行期間を設けた後にデンマーク領内におけるアフリカ奴隷の貿易を禁止するものであった。だが、これは貿易の禁止であり、プランテーションを維持するために奴隷制自体は存続していたのであった。そして奇しくも、デンマーク本国において絶対王制が終焉を迎えたのと同じ年 1848 年に、デンマーク領西インド諸島 (以下、デンマーク領西インドと表記) における奴隷解放が実現したのである。

このデンマーク領西インドに関する研究は、これまで日本においては手つかずの状態、ようやく 1990 年代より関心が向けられるようになってきた。内容的には奴隷貿易や奴隷制が中心で、奴隷解放そのものを直接扱ったものはない。⁵

本稿においては、デンマーク領西インドで 1848 年 7 月に実施された (黒人) 奴

隷解放に関して、その解放が如何なる過程を経て実施されたのかを史料を基に明らかにしたい。そしてその際、奴隷解放の実施者である当時の総督 (generalguvernør), ペーター・フォン・ショルテン (Peter von Scholten (1784-1854)) の政策に焦点を当てながら考察したい。

2. デンマーク領西インド諸島

まず、本稿の舞台となっているデンマーク領西インド地域について、当時の状況を簡単に述べたい。

2.1. 歴史

コロンブスが1493年に後のサント・クロイス島のソルト・リバーに上陸するまで、同島を含む他2島にはカリブ族とアラワク族が居住していた。コロンブスが来訪し、その島をサンタ・クルーズと呼んで以来、この美しい島の存在がヨーロッパ人に知れた。その結果、島々を巡るヨーロッパ列強間の激しい領土争奪が行われる。まず、スペイン、英国、そしてオランダ、フランス、マルタ騎士団等によって領有が争われた。この中で、デンマークは西インド支配のために1671年に西インド・ギニア会社 (Det vestindisk-guinesiske kompagni) を設立し、翌1672年に最初の本格的植民者をサント・トマス島 (面積 70 km²) に送り込んだ。また1718年には総督ブレダール (Erik Bredal) がサント・トマス島の隣にある小島 サント・ヤン島 (49 km²) をデンマーク領に併合した。さらに、上述の通り1733年にはフランスよりサント・クロイス島 (213 km²) を購入した。サント・クロイス島は3つあるデンマーク領西インドの中で、最も面積が大きくかつ肥沃な島であったため、デンマークにとっては富を生む経済的に重要な場所となった。フランス領時代より主に砂糖キビや綿花を栽培するプランテーションが展開しており、これに呼応して大量の労働力が求められた。原住民であるインディオは労働に適さず、デンマークからの植民も成功しなかった。そこでアフリカからの黒人奴隷が労働力として大量投入されることになったのである。このことを具体的な数字で見みたい (表1参照)。

表1. デンマーク領西インドにおける白人及び黒人の人口変化 (1688-1846)

(年)	サント・トマス島		サント・ヤン島		サント・クロイス島		3 島合計	
	白人	黒人	白人	黒人	白人	黒人	白人	黒人
1688	317	422						
1691	389	547						
1715	555	3,042						

(年)	セント・トーマス島		セント・ヤン島		セント・クロイス島		3 島合計	
	白人	黒人	白人	黒人	白人	黒人	白人	黒人
1755	325	3,949	213*	2,031	1,303*	8,897	1,841*	14,877
1770	428	4,338	118	2,302	1,515	18,884	2,061	25,524
1789	492	4,614	167	2,200	1,952	22,488	2,611	29,302
1797	726	4,769	113	1,992	2,223	25,452	3,062	32,213
1815	2,122	4,393	157	2,306	1,840	24,330	4,119	31,029
1835	8,707*	5,315	532*	1,943	6,805*	19,876	16,044*	27,134
1846	9,579*	3,494	660*	1,790	7,359*	16,706	17,598*	21,990

(出典：Hall, Neville A.T., *Slave Society in the Danish West Indies*, Jamaica, 1992, p.5
より筆者作成) *印は自由黒人を含む数字，空欄は統計なし。

3島の統計が初めて揃う1755年でみると，黒人奴隷の数はセント・トーマス島には3,949人，セント・ヤン島には2,031人，セント・クロイス島では8,897人であった．それが60年後の1815年には，セント・トーマス島で約1.1倍，セント・ヤン島で同じく約1.1倍，そしてセント・クロイス島では約2.7倍に増加している．島別に見ると，その60年の間，セント・トーマス島は4,000人台，セント・ヤン島は2,000人前後で奴隷の数が大体一定しているが，砂糖キビ生産の盛んなセント・クロイス島では1797年まで着実にその数が増加している．

またプランターの国籍をみてみると，例えばセント・クロイス島で300エーカー以上を所有する者の割合は1742-1804年で，英国人が40%，デンマーク人23%，オランダ人8%，フランス人5%，その他24%，⁶ となっておりデンマーク人以外が大半を占めていた．

なお，1755年以降，デンマーク領西インドの所有権は西インド・ギニア会社から国家，即ちデンマーク国王に移った．次にデンマークの行なった奴隷貿易について述べたい．

2.2. 奴隷貿易

当時デンマークが行っていた植民地貿易は，いわゆる「三角貿易」と呼ばれるものであった．まず，デンマーク本国よりアフリカに向けては，現地の拠点である要塞に必要な食料品，布，武器が運ばれた．そして，アフリカからデンマーク領西インドへはプランテーションに必要な労働力，即ち武器等との物々交換で獲得した黒人奴隷（主として男子）が輸送された．これが「奴隷貿易」と呼ばれる

もので、1761-1802年では年平均約1,000人程度が送られた。⁷ 結局デンマークによって1733-1802年の70年間に約5万人の奴隷がアフリカから輸出されている。⁸ 最後に西インドからデンマーク本国へは粗糖、ラム酒、綿花等が運ばれた。粗糖はコペンハーゲンで精製され、綿花も布に加工された。

さて、次にこの「奴隷貿易」に関して、デンマークの占める割合をみてみたい。これまでアフリカ大陸から大西洋を越えて南・北アメリカに輸送された黒人奴隷の総数は約1,000万人ともいわれ、⁹ その内の50%は南米へ、43%はカリブ海地域、そして4.5%が北アメリカに分配されたとされる。¹⁰ そのような中でデンマークの奴隷貿易が全体に占める割合は、1761-1810年のアフリカから輸出された奴隷に関する統計によれば、約2%弱で、世界的に見ればかなり小規模である。¹¹

2.3. 奴隷のおかれた状況

アフリカから数ヶ月に渡る過酷な中間航路を経て、デンマーク領西インドに到着した奴隷はすぐに公開オークションにかけられた。その後大半は農業奴隷として各プランテーションに配置され、主に砂糖キビや綿花の生産に携わった。この他に手工業に携わる職人奴隷、家事などを主に行なう家内奴隷、さらに西インド・ギニア会社（後に国王）に雇用され、倉庫での仕事や要塞建設等に関わる奴隷もいた。¹² 農業奴隷達の衣・食・住及び医療は奴隷主が提供し、さらに世帯ごとに小規模な菜園用の土地が割り当てられた。この菜園から得られる作物が奴隷達の副食になり、余剰作物は市場で物々交換されたり、換金されたりした。生活の中で奴隷達は主人の使用言語である英語、オランダ語をもとにしたクレオール語を話し、キリスト教を信仰する者も多かった。人口面で見ると（表1参照）、奴隷はプランテーションが多く展開するサンクト・クロイス島に一番多く、次いでサンクト・トーマス島、サンクト・ヤン島の順であった。また1755年以後における白人と黒人の人口比は、白人人口に自由黒人が含まれる1834年以前でみると、最大で12倍以上、最低でも7.5倍であった。また男女比では通常男子が女子の数を上回っていた。

このようにデンマーク領西インドは、黒人奴隷の数が常に白人よりも遙かに多い奴隷社会であった。数で優る黒人奴隷の反抗・反乱を恐れた白人は奴隷に関する、いわゆる奴隷法を制定して彼らを統制した。奴隷貿易廃止以前では1672, 1684, 1733, 1755年の奴隷法が知られている。1733年の奴隷法はその大半が逃亡に関する規定で占められ、逃亡者には絞首刑を含む厳格な処罰が科せられた。サンクト・トーマス島他全3島の支配権が西インド・ギニア会社から国王に移行して後の1755年には新たな奴隷法が制定されている。そこでは奴隷主の奴隷に対する権利が再確認されると同時に、奴隷主の責任も明確化されていた。¹³ さらに、奴隷達

は公的な地位が認められず、裁判の証人にもなれなかった。¹⁴ また、身分的に見ると黒人達は奴隷身分の者と奴隷身分から解放されて自由を得た者、即ち自由黒人の二種類が存在した。¹⁵ 自由黒人は小規模な農地の所有が認められ、そこで労働をする黒人奴隷を所有することも許されていた。しかしながら、法的な地位はかなり限定されていた。彼らが白人と平等な権利と特権を獲得するのは、後に述べるペーター・フォン・シオルテンが登場する時代、1834 年になってからであった。

この奴隷制に異を唱える奴隷は日常生活における個人的反抗、自死、農園からの逃避、そして組織だった反乱という方法などで、その意思を示した。これらの内、反乱では 1733-34 年にサンクト・ヤン島で起こったものが唯一最大で、この時は一時黒人たちが島全体を支配した。最終的にはフランス軍の協力を得てようやく鎮圧された。

2.4. 奴隷貿易廃止

次に奴隷貿易廃止勅令が公布される 1792 年までの動きをみてみたい。18 世紀後半は啓蒙思想がヨーロッパに普及した時代であり、それに呼応して非人間的な奴隷貿易を廃止する動きが出てくる。当時、全奴隷貿易の大半を扱っていた英国では、まずクエーカー教徒、そして福音主義者らが真剣に奴隷貿易廃止を唱える運動を展開し、1787 年には各運動が結集して「奴隷貿易廃止委員会」が設置された。¹⁶ 以後この委員会が運動の中核となり、多数の請願が議会に提出されることになった。1791 年には西インド植民地への奴隷輸出禁止法案が下院に提出されたが否決されている。一方フランスでは、1788 年、パリにおいて「黒人友好協会」が創設され、奴隷貿易廃止運動の中心となっていった。

ヨーロッパにおけるこれらの動きをみて、デンマークでは 1791 年夏に、財務大臣シメルマン (Ernst Schimmelmann) が中心となって、奴隷貿易について検討する「大奴隷貿易委員会 (Den store Negerhandelskommission)」が設置された。委員会は約 5 ヶ月間の討議の後、1791 年 12 月 28 日に答申を行なった。この答申書は全 102 頁で、その要点は次の通りであった。デンマークの奴隷貿易自体は利益率が低い
ため継続するに値しない、ある条件が満たされれば黒人奴隷が新規に輸入供給されなくても砂糖キビ産業を維持できる。この大奴隷貿易委員会の答申に国王裁可が下され、1792 年 3 月 16 日に、デンマーク領内での奴隷貿易を廃止する旨の法律（正式には「1792 年の 3 月 16 日の奴隷貿易に関する勅令」）が公布されたのであった。¹⁷ それは世界に先駆けて、10 年後にデンマーク領内における奴隷貿易を廃止することを謳った、当時としては画期的なものであった。しかしこの勅令は、経済的に価値のある砂糖キビ生産を維持するためには黒人労働力が必要だという立場から、その 10 年間の移行期間中に必要な奴隷を一挙に確保すべく、逆に政府

が奨励金等を出すなど奴隷貿易を促進してもいた。

世界史的な意義があるデンマークの奴隷貿易廃止措置は、罰則規定が無かったため効力に疑問が残った上に、あくまでもこれは奴隷貿易の廃止のみであった。従って奴隷制自体は、1848年まで厳然と存在することになったのである。

3. 奴隷解放の前提条件

既述の通り、1848年にデンマーク領西インドで奴隷解放を宣言したのは、当時の総督ペーター・フォン・ショルテン（以後、フォン・ショルテンと表記）であった。だが、その解放は突然実現したのではなく、当然それ以前の積み重ねがあった。本章ではまず、フォン・ショルテンのデンマーク領西インドとの関わりを確認し、その後彼の行なった主要な改革について論じる。さらに、1847年以前に行なわれた奴隷解放に向けての試みも考察していく。

3.1. ペーター・フォン・ショルテン

フォン・ショルテンは1784年にユトランドのヴィボーに生まれた。父親は軍人でデンマーク領西インドのサンクト・トーマス島及びサンクト・ヤン島の司令官であった。フォン・ショルテンが初めて西インドに少尉 (fændrik) として赴任したのは1804年であった。1807年には折からのナポレオン戦争でデンマークが反英陣営にまわったため、英国がデンマーク領西インドを占領した。そのためフォン・ショルテンは1808年に父親共々、戦争捕虜として英国に移送された。同年の秋、デンマークに戻ったフォン・ショルテンは当時の国王フレデリック6世（在位1809-39）の副官となり、国王お気に入りの赤羽親衛隊 (de røde fjer)¹⁸の一員になった。このことを通じて国王との個人的な信頼関係が生まれ、以後フォン・ショルテンは政治的に大きな後ろ盾を得ることになった。¹⁹ この後彼は1810年には中尉、1811年に大尉、そして1813年には参謀将校と着実に昇進を重ねていった。1814年にサンクト・トーマス島の検量官 (vejermeister) に任命されて、フォン・ショルテンはようやくデンマーク領西インドに戻ってくる。以後、1818年には都市防衛司令官 (stadshauptmand)、さらに1823年にはサンクト・トーマス島の長官 (guvernør) に任命された。そして1827年、フォン・ショルテンは代理ではあるがデンマーク領西インドにおける最高位の官職である総督 (generalguvernør) に就任した（1835年より正式に就任）。20年以上に渡ってデンマーク領西インドと関わってきた彼は、歴代の総督とは異なり、地域に関する豊富な知識や人脈と共に黒人達への理解も持ち合わせていた。彼には黒人たちに対する人種差別意識がなかったといわれており、²⁰ 黒人と白人の融和をはかるために様々な改革を行なった。中でも知られている改革が1834年の奴隷法制定と西インド諸島における

奴隷学校創設である。次にそれらを一瞥したい。

3.2. 1834 年の奴隷法

1780 年頃には数百人程度しか存在しなかった自由黒人は、1830 年前後には約 9,000 人へと全人口の 5 分の 1 規模まで急増し、無視できない勢力へと発展していた。²¹ ただ問題は彼らが自由身分を保持しながらも、その法的地位や権利は白人より黒人奴隷に近かったことであった。それ故、フォン・ショルテンは奴隷解放問題を解決するには、まずこの自由黒人の地位問題を解決して、自由黒人を白人社会に融和させた後に奴隷解放を実施しようと目論んでいた。そのためには自由を買い取った黒人の法的地位がまず白人と平等である必要があった。数年間の交渉の結果、出されたのが 1834 年 4 月 18 日勅令 (Fr. ang. nærmere Bestemmelse af de Frierfarvedes borgerlige Stilling paa de danske vestindiske Øer) である。この勅令により、全ての自由黒人に白人と平等の権利と特権が与えられた (1 条)。但し、この勅令公布後に自由になる者については、完全な自由を獲得するまでに 3 年間の待機期間が必要とされた (2 条)。²² この勅令により、これまで曖昧であった自由黒人の法的立場が、明確に白人と平等となったことは意義深い。フォン・ショルテン流奴隷解放への基礎がまず築かれたのである。しかし、問題点は法的に白人と平等になった自由黒人を、白人社会が現実的に受け入れてくれるかということであった。²³ この点でフォン・ショルテンは官吏として採用されていた自由黒人達をその家族共々、白人が同席する食事やパーティに積極的に招待したり、自由黒人の士官を自分の副官に採用するなど、率先してその融和に努めた。

また 1834 年にはフォン・ショルテンの努力が実を結び、中央政府内に西インド領について議論する委員会が設置されている (以下、西インド問題検討委員会と略)。²⁴ そしてその委員会は、奴隷の権利や待遇に関する討議を行なった上で報告書を作成し、それを基に勅裁書 (Reskript)²⁵ が出された。これが 1834 年 11 月 22 日の勅裁書であり、以下のことを認めていた。黒人奴隷の自由身分買い取り権、黒人奴隷の所有権、黒人奴隷の奴隷主を替える権利、奴隷処罰権の制限。²⁶ さらに、約束条項と呼ばれる付帯条項がついていた。その内容は将来のプランテーションでの労働時間数削減、黒人奴隷子弟のための学校創設であった。この勅裁書の内、どれを現地で公にするかはフォン・ショルテンの裁量に任せられていたが、結局、プランターの反発を恐れ約束条項はすぐに公表されなかった。²⁷

3.3. 西インド領における奴隷学校創設²⁸

フォン・ショルテンが奴隷解放の過程で次に重要だと考えたのは教育であった。その理由は黒人奴隷たちが、教育を受けて自立した生活を送れるようになって、

初めて完全な奴隷解放が行われるべきだと考えていたからであった。デンマーク領西インドでは既に18世紀前半より宗教団体が中心となり黒人奴隷をキリスト教化するために教育の場が限定的に設けられてはいた。これをフォン・ショルテンは大々的に対象を全黒人奴隷子弟にまで拡大し、一般義務教育を無償で導入しようとしたのであった。²⁹

1833年に英国が先陣を切って奴隷解放を決定したことにより、危機感を抱いたフォン・ショルテンは国王達と直接交渉を行なうために、1834年初めに母国デンマークを訪問した。その結果、先に述べた1834年11月22日の勅裁書第8条に、将来の黒人奴隷子弟に対する義務教育の約束がなされたのであった。³⁰ さらに1834年に設置された先の西インド問題検討委員会の報告書(1834年11月13日付)では、西インド領における学校の設立及び詳細が現地の委員会によって決定されるべきとの見解が示されていた。それ故、フォン・ショルテンはこの後約3年をかけて各方面を説得し、ようやく時期をみて、1838年5月中旬に現地委員会を組織した。この委員会は19人で構成され、³¹ サンクト・クロイス島では適当な場所に8つの学校を設立し、基本的にはプランターが建設費や運営費を提供すること、また学校の運営にあたり物品や労働力を提供できない場合に、公庫から補助金が支出されること等を論じた。

一方デンマークにおいては、1839年1月2日付けでフォン・ショルテンの学校令案が示され、西インド問題検討委員会ではそれがすぐに承認された。最終的に1839年6月には学校令(Landskoleordningen)が国王の承認を受け、³² 正式にサンクト・クロイス島には8ヶ所、サンクト・ヤン島には4ヶ所、サンクト・トーマス島には5ヶ所の学校が創設されることになった。³³ 就学対象年齢は6歳から13歳で、労働の担い手である9歳以上の子供は土曜日の午前中のみ、それ以下の年齢の子供達は労働力とならないため、平日の午前中3時間学校に通うことになった。授業は議論の末、英語で行われることになった。また授業運営に当たっては、既にデンマーク領西インドで長年に渡って布教活動を行い、教育実践にも実績のあったモラヴィア兄弟団(de moraviske brødre)³⁴の援助を受けることになった。この方が教師をデンマークから派遣するよりも経費がかからなかった。そして各学校の運営については、4人からなる現地の学校委員会(デンマーク人牧師、警察、市民代表、総督が任命する者1名)が決定を行なうことになった。

フォン・ショルテンの意図は、奴隷達に学校教育を受けさせて自立させた後に解放を行なうことであった。その方が与えられた自由をよりよく享受できると彼は考えていた。この西インド諸島における教育に関しては、王女カロリーネ・アマリエ(Caroline Amalie)も関心を寄せており、フォン・ショルテンの努力を称える書簡(1839年2月27日付)を送っている。³⁵ なおこの制度の最も大きな特徴は、

世界でも珍しく黒人奴隷子弟に義務教育制度を導入したことにある。

3.4. 奴隷解放への道のり

黒人と白人の融和を望んだフォン・ショルテンの最終的な目標は、当然のことながら奴隷解放であった。しかし、その力点は解放そのものよりもそのプロセスにおかれていたと思われる。それ故に急な解放ではなく、十分に準備された解放を目指していた。³⁶ またナポレオン戦争での敗戦後、デンマークは経済的にも困難な時代を迎え、黒人たちを即時に有償解放することは現実的に不可能でもあった。そこで彼は十分な移行期間が必要であると考え、奴隷達が自覚した責任をもったうえで、社会の独立した構成員となることに重点をおいた。このことに関しては国王との個人的な関係も利用しながら推進したが、一方で最も大きな被害を被ることになるプランター側からの揺さぶりにも直面した。

フォン・ショルテンは1827年に総督代理に就任するや新しい試みを行なった。それは警察に訴えても満足のかない黒人奴隷の奴隷主に対する不満を、直接総督にアピールすることを可能かつ奨励したことであった。これにより、奴隷たちの置かれた厳しい状況やシステムを彼は自身で確認し、是正出来るようになったのである。³⁷

先述のとおり、黒人奴隷の権利拡張に関する1834年11月24日の勅裁書がようやく公にされたのは、1840年になってからであった(1840年5月1日勅令)。そこでは奴隷の状況に関することは、奴隷主と協議を行なうという前提がつけられていた。そこでフォン・ショルテンはコペンハーゲン滞在中に議論した土曜日の休日化について、サンクト・クロイス島のプランターとの協議を開始した。彼らは、休日である土曜日に労働した場合の賃金支払いには難色を示し、協議は難航した。そこでフォン・ショルテンはプランター側の切り崩しを図る為、島ごとに話し合いを持った。³⁸ サンクト・ヤン島のプランター達は基本的にフォン・ショルテンの案に賛成したが、土曜日に関しては半年間一日中休みにするのではなく、一年を通して土曜の午後を休日とする意見が示された。さらにサンクト・トーマス島のプランターは最初協議に非協力的であったが、最終的には大半の者が年間を通しての土曜休日化に同意した。だが、休日労働を行なった場合の補償については拒否された。これらの協議から浮かび上がるのは、常に譲歩を迫られるプランター達が基本的には当時の奴隷制に満足していて、フォン・ショルテンの描く更なる改革には乗り気でなかったことである。さらに言えば彼らの関心は、将来実施されるであろう奴隷解放が有償か否かに向けられていたのである。

この泥沼的状况を打開する為に、フォン・ショルテンは国王や政府高官と協議する目的で、1842年3月1日に再度デンマークを訪れた。そしてこの時には反対

派からの攻撃が彼を待ち受けていた。例えば弁護士サラウ (Sarauw) が、フォン・ショルテンの政策を批判するプランター45名からの覚え書きをデンマークへ持っていき、それが「祖国」紙（1月23日付）に掲載された。³⁹ これにより西インドにおけるフォン・ショルテンとプランターの対立が、本国のデンマーク国民にさらけ出されることになった。フォン・ショルテンはデンマーク到着後、西インド問題検討委員会を中心に、プランター側の譲歩が必要なことを説いた。また彼は最終目標にすべきは奴隷の完全解放であり、プランターの述べる部分的解放は誤っていること、目標達成のためには長い準備期間が必要なことを力説した。こうしたプランターとフォン・ショルテンの対立も、1843年2月18日のクリスチャン8世（在位1839-48）による勅裁書で、一応の決着がついた。そこでは「土曜日は収穫期以外、完全な休日とする」⁴⁰ とされ、両者の対立点が仲裁されていた。さらに収穫期の土曜労働に関しては、定額賃金（40 スキリング Skilling）が支給されることになった。また勅裁書はフォン・ショルテンが以前より打ち出していた奴隷に対する扱いを善処することや刑罰の軽減にも言及していた。土曜日が休日になったことで、中心部では市が開催され、奴隷たちが作った物、例えば野菜等を売買できるようになった。このようにして、奴隷達は自分の解放資金を貯めることが可能になったのである。なお、この勅裁書は解放のことには全く触れていなかった。

また、1836年にはデンマークで約150年ぶりに開催された地方身分制議会（Stænderforsamling⁴¹ ロスキレ議会）で西インド領における奴隷制廃止問題が取り上げられた。だが提案者は、政府が奴隷と奴隷主間における法的関係改善の準備をしているという回答に満足してしまい、結局数年間地方身分制議会では本件が取り上げられなかった。そしてようやく1844年になってグルントヴィー (N.F.S. Grundtvig)、ダーヴィズ (C.N. David)、そしてスコウ (J.F. Schouw)、モンラッズ (D.G. Monrad) といった当時の著名な人物が、⁴² ロスキレ議会においてデンマーク領における奴隷制の完全廃止を求める共同提案を行なった。この提案自体は議員の間で善意を持って受け入れられたが、時間切れの為採決には至らなかった。それ故、ダーヴィズが次のロスキレ議会（1846年）に再度提案を行なった。そして1846年の議会では委員会が設置され、オーラ・レーマンと激しい論争が戦わされたが、結局結論は出ず終いであった。最終的には、次の議会で完全なる奴隷制廃止法案を取り扱うよう国王に陳情することが決議されたのであった。

これを受けて、国王クリスチャン8世は中央関税局 (generaltoldkammer) にその件に関する諮問を行い、さらに中央関税局は西インド総督であるフォン・ショルテンに意見を求めたのであった。

以上のように、1847年以前、黒人奴隷解放に関するデンマークの世論は、地方

身分制議会での決議にみられたとおり、解放に関して好意的であった。国王も同様であり、絶対王制下の政府高官も同じ立場であった。しかし、ナポレオン戦争での敗戦を経験し、経済的に厳しい状況の中、さらに西インドでの砂糖産業が衰退する中で、有償の奴隷解放は不可能であった。奴隷主は砂糖景気衰退の中で、さらなる経済的・社会的被害を被る無償の奴隷解放に関しては受け入れ難かった。だが、その一方で英国領の奴隷が解放された影響、国王の意向も含めたデンマーク国内の世論も承知していた。それ故、問題は国家にとって負担が少なく、奴隷主の同意を獲得できるような解放をいつ、どのように行なうかであった。フォン・ショルテンの手腕が問われていた。

さらに、国王（クリスチャン8世）とフォン・ショルテンとの間における奴隷解放の考え方にも差異がみられた。後述のように国王のスタンスは、解放はなるべく早く行い、子どもは生まれながらにして自由であるべきだというものであった。一方フォン・ショルテンは、解放は段階を追って慎重にかつ完全に実施したいと考えていた。この後僅か一年間に大きな変化が訪れることになる。

4. 奴隷解放

4.1. 1847年7月28日の勅裁書

1833年に決定され約5年の移行期間を経た後、1839年に完全実施された英国領における奴隷解放については、デンマーク国王クリスチャン8世も大いなる関心を寄せていた。そこで特使としてローテ (Rothe) を派遣し、詳しい情報を収集させた。フォン・ショルテンも国王の意向を受けて、1847年初頭にデンマークへ向かう途中、ローテとロンドンで落ち会って意見を交換している。

そして1847年1月にフォン・ショルテンは、奴隷解放に関する案を国王に提出した。そこでは解放までの移行期間が16年といった内容が盛り込まれており、これを基に国王と協議が行われた。国王は数年来の持論である、奴隷の両親から生まれた子どもは誕生した時点で自由であるべきだという考えを主張した。⁴³ これに対してフォン・ショルテンは、子どものみが自由になっても奴隷身分のままである両親からの反発を招くだけであると強い反対意見を述べた。⁴⁴ 中央官庁の一つであるデンマーク官房はショルテン案に賛意を示したが、国王は持論に固執し、早急に結論を求めた。まず、1847年6月28日（王妃の誕生日で戴冠式を挙行了した日）を目指したが、時間的に適わず、7月28日に国王が勅裁書をフォン・ショルテンに示した。そこでは「正義と人間的な動機から、そして植民地の繁栄とプランター自身の利益より」、⁴⁵ 次の二点が指示されていた。即ち12年後に奴隷解放が実施されること、そして1847年7月28日以降に生まれた新生児が奴隷身分より解放されることであった。これらの点については後にフォン・ショルテンが述

べるように、彼自身大反対であった。⁴⁶ だが、当時は絶対王制下で国王の命令には従わざるを得なかった。特にフォン・ショルテンは移行期間を最低16年と主張していたが、それよりも短い期間で決着していた。これには国王の意向が強く働いたと考えられる。何故なら実際勅裁書の該当欄は空欄になっており、国王自らが12という数字を書いたと伝えられているからである。⁴⁷ また、国王はフォン・ショルテンが帰国後速やかに勅裁書に示された内容を実行する委員会の設置も指示していた。

上記の勅裁書を携えてフォン・ショルテンは9月16日に総督官邸のあるサンクト・クロイス島に戻ってきた。そしてその内容は国王の誕生日である9月18日に公布された。フォン・ショルテンにとっては不満な部分もあったが、奴隷解放の時期に関する具体的記述があるなど、これまでより一歩踏み込んだものではあった。当時のフォン・ショルテン自身の報告によると、ブランターの大部分は平静を持ってその知らせを受け取ったが、黒人奴隷たち、特に町の奴隷たちの落胆は大きかった。⁴⁸ その嘆きは「子供たちは自由であるが、私たちは奴隷のまま(our children free, but we slaves)⁴⁹」という表現に代表されていた。結局のところこの奴隷解放を明示した法律は、国王の思惑とは反対に、黒人奴隷から感謝されるどころか、不満だけを生んだのであった。この後、奴隷たちの不満と自由に対する欲求がマグマのように伏流し、それが行動として表れるのも時間の問題であった。

4.2. 1848年7月3日

そして世界史における激動の年、1848年を迎えた。デンマーク史においても例外ではなく、国の内外で様々な出来事が起こった。まず、1月20日にクリスチャン8世が急逝し、息子のフレデリックがフレデリック7世（在位1848-63）として王位を継承した。⁵⁰ そしてヨーロッパではフランスで2月革命が勃発し、共和制が樹立された。オーストリア、プロイセンではその影響を受けて3月革命が起こった。デンマークでもこれらの影響を強く受けて自由主義が高揚し、3月21日には王位を継いだばかりのフレデリック7世が、絶対王制維持の困難さを悟り、王宮に詰め寄った市民代表者達に絶対王制の終焉を告げたのであった。またこれを機に、公爵領内ではデンマーク軍とキールに臨時政府を樹立したシュレースヴィヒ・ホルシュタイン主義者の軍との戦争も始まった。⁵¹

このようなヨーロッパでの激動を受けて、西インド方面でも様々な影響が見られた。まず3月に近隣のフランス領マルティニーク及びグアドループ(Guadeloupe)で奴隷暴動が発生し、⁵² そのニュースがいち早くデンマーク領西インドにも伝わった。結局5月末に両フランス領における奴隷解放が現地総督の手

により行われた。5月30日にはプエルトリコのスペイン総督プリム (Prim) がフォン・ショルテンに書簡を送り、フランス領の暴動について言及すると共に、その影響を受けてデンマーク領で事件が発生した場合に必要な軍事的援助の提供を申し出ていた。⁵³ こうしたヨーロッパでの動きや近隣の島の状況をみて、デンマーク領西インドにおける白人達の間にも不安が次第に広まっていくことになった。

一方、デンマーク領の黒人奴隷たちも上記のような状況、特に近隣地域における奴隷暴動をうけて、自由獲得への強い欲求を持った彼らの間にも密かに不穏な動きが広がっていた。⁵⁴ 7月2日(日曜日)の夜、サンクト・クロイス島西部のプランテーションにおいて合図の火があげられた。その後8時頃に各プランテーションの鐘が一斉に鳴らされ、同時にホラ貝も吹き鳴らされた。これを受けて黒人奴隷たちが続々とプランテーションごとに集まりだし、その後彼らは騒々しく町の方へ移動した。翌3日の朝までに約5,000~7,000人の黒人奴隷達がサンクト・クロイス島西部の中心都市フレデリックステズ (Frederiksted) にあるフレデリック要塞 (Frederiksværn) 前に集結した。彼らは手に短剣、やり、または先の尖った砂糖キビ等の武器を手にしていて。⁵⁵ 夜の間の一部の黒人奴隷達は警察署長のアンドレソン (Andreson) に詰めより解放を要求した。彼は身の危険を感じそれを認めたが、総督の承認が必要であるとの付帯条件をつけていた。⁵⁶ またフォン・ショルテンの弟で、町の防衛副司令官であるフレデリックのもとにも奴隷たちがやってきて解放を求めた。⁵⁷ この時点で幸いしたのは白人側、黒人側の双方に何らかの抑制が働いていたことだった。白人たちは発砲が警報であったとしても、それが引き金となって町全体が焼き討ちにあい、白人自身の生命が危険にさらされることが容易に想像できた。その上、黒人の方も大砲や銃の威力を承知していたことに加え、誰が解放を実現できるのか分かっていた。自由を求めて要塞前に集結していた奴隷達は時間の経過と共に苛立ち始め、興奮した一部の者は警察署を襲撃し、また奴隷に発砲すべきだと主張した商人ムーアの商店を襲い略奪した。なお、この時点で大半の白人たちは湾内に停泊する船の中に逃げ込んでいた。

一方、総督のフォン・ショルテンは公用で渡っていた隣島サンクト・トーマス島から自宅(サンクト・クロイス島)に7月2日の夜戻ったばかりであった。フレデリック要塞長カストニア (Castonier) からの一報が午前2時頃に届くや、フォン・ショルテンはクリスチャンステズにある官邸で、顧問達側近と緊急会合を開き対応を協議した。明け方には弟のフレデリックからも町の状況と「代表との交渉により秩序回復が可能だと願う」⁵⁸ というメッセージを受け取った。ようやく午前8時半頃に、到着を待っていたフレデリックステズ警察署長アンドレソン

からの報告が届いた。そこには昨夜からホラ貝が吹き鳴らされていることが書かれていたが、暴力行為に関する記述はなかった。さらに封筒の上には「総督からの返事がない場合は全ての黒人奴隷が正午にフレデリックステズに集合する」という噂が走り書きされていた。⁵⁹ フォン・ショルテンはすぐにでもフレデリックステズに向かう意向を示したが、周囲に「拉致される噂がある」と説得されて思い止まった。フォン・ショルテンがこれまで受け取った報告には、断片的な情報しか示されておらず、奴隷たちの蛮行も明らかでないため、正確な判断が下せなかった。そこで彼は正確な状況を把握するために2人の部下を急派した。その内の一人が午後1時頃帰着し、「騒乱が暴動化していると共に、多くの黒人が町に流入している」⁶⁰と報告をした。さらに、弟のフレデリックからも「町の破壊を防ぐためにも速やかに来て欲しい」⁶¹という2回目のメモが届き、フォン・ショルテンはフレデリックステズに向かうことを決断した。フォン・ショルテンが2人の役人を従えて陸路で同地に向かう途中、群集に何度か馬車を止められたが、その度に静かにプランテーションに戻るよう伝えた。フレデリック要塞には午後3時ないし4時頃到着し、馬車から降りるやいなや、取り囲んだ群集に向かって次のような歴史に残る言葉を発した。「いまや君たちは自由です。君たちはここに解放されたのです。(You are free now. You are hereby emancipated.)」⁶²

同日夜に正式な布告がデンマーク語及び英語で印刷された後、各方面に配布された。その内容は次の4点であった。⁶³ デンマーク領西インドにおける全ての不自由民（奴隷）は本日より解放される、農業奴隷はこれより3ヶ月間、これまで有してきた家屋や支給農地を使用することが出来る、将来、労働に対する賃金は契約により支払われるが、食糧等の支給は廃止する、老人や虚弱者といった労働が不可能な者の維持は、更なる決定がなされるまで最終の奴隷主によってなされるべきである。

まず、この解放は前提条件のない即時解放である。その一方でこれまで奴隷主が支給していた食と住の保障が無くなり、特に食についてはすぐに自立することを求めている。また、自立が困難な老人と虚弱者には配慮が示されている点が評価できる。しかし性急に公布された為、一番の関心事である今後の労働契約のことについては全く触れられていなかった。⁶⁴

フォン・ショルテンが奴隷解放を宣言した後、直ちに奴隷達の暴動が止み、暴徒が解散したわけではなかった。解放宣言の後、黒人奴隷たちの一部がクリスチャンステズに集結し始めたとの知らせを受けて、フォン・ショルテンはすぐ同地に引き返した。だが、クリスチャンステズの西門付近では威嚇射撃にも群衆が立ち去らず、身の危険を感じた軍隊が発砲をしたため数人の黒人が倒れた。⁶⁵ 今回の事件における初の犠牲者であった。7月4日からは関係者が奴隷解放の布告

を持って各プランテーションをまわった。フォン・ショルテンも自ら馬に乗り、黒人たちに解放を知らせ、プランテーションの略奪をしないよう説いてまわった。7月8日にはフォン・ショルテンが要請した援助軍（約600名）がプエルトリコより到着している。この軍隊の存在により、ようやくサンクト・クロイス島の黒人達も落ち着きを取り戻すことになり、島は暴動発生以前の状態に戻った。なお、サンクト・トーマス島及びサンクト・ヤン島における黒人奴隷の解放はサンクト・クロイス島と比較してスムーズに進んだ。⁶⁶

5. おわりに

以上見てきたように、デンマーク領西インド諸島で1848年7月に実現した黒人奴隷解放は、ペーター・フォン・ショルテンの改革が進む中、段階的な解放が確約された1847年7月28日勅裁書の内容や1848年前半における近隣諸島での奴隷反乱を機に、サンクト・クロイス島で蜂起が発生したことにより実現した。この経過を簡単に整理しておきたい。

まず18世紀半ば以来、砂糖キビ生産の為にデンマーク領西インドに大量の黒人奴隷が投入されて、最大時で人口の約9割を占めた。そしてその黒人奴隷を管理する為に様々な奴隷法が制定されたが、法律上奴隷は人格権を否定され白人の私的所有物とみなされた。18世紀後半において黒人には自由黒人と黒人奴隷の二種類がみられたが、1830年頃には自由黒人が全人口の2割程度を占めるようになっていた。1827年に総督代理に就任した、黒人と白人の融和を望むフォン・ショルテンは、最終目標を奴隷解放におき様々な改革を実施していった。まず、法的に曖昧であった自由黒人の身分を白人と同等とした（1834年4月18日勅令）。そして次に、残った黒人奴隷の待遇及び地位を改善し（1834年11月22日勅裁書、1840年5月1日勅令、1843年2月18日勅裁書）、黒人奴隷の自由黒人化を促した。その一方で解放後の社会を想定して、例えば1839年の学校令で黒人奴隷子弟に初等義務教育を開始するなど奴隷達の自立を準備している。そして1847年7月28日勅裁書で、奴隷解放が12年後に行われること及び新生児の即時解放が示された。国王の予想に反してこの措置が結果的に黒人奴隷達の不満を拡大させることになった。その中で激動の1848年を迎えるが、まず近隣のフランス領で奴隷暴動が発生し、それを機に奴隷解放が実施された。その影響がデンマーク領西インドにも及んだ。1848年7月3日、11年後の解放を待ちきれない黒人奴隷達は、自由を求めてサンクト・クロイス島西部のフレデリックステズに集結した。その規模は同地区における奴隷人口のかなりの部分を占め、総督フォン・ショルテンは事態を収拾する為に、彼らに即時解放を宣言した。形式的には、いわば下からの要求により奴隷解放が実現したのである。

次にこのデンマーク領西インド諸島における奴隷解放の特徴を考えたい。まず最大の特徴は、同時期の他のカリブ海諸国でみられた血なまぐさい奴隷解放とは異なり、殆ど無血に近かったことである。⁶⁷ さらに全体として奴隷達の行動が大暴動化せず、例えばフレデリックステズでは既述の通り、少なくともある種の秩序が保たれていた。ここに今回の蜂起において何らかの指揮・命令系統が存在したことが伺える。⁶⁸ またこのような団体行動が可能であった背景には、次のようなことが考えられる。まずこの頃になると奴隷の大半が島生まれのクレオールであり、言葉もお互いに通じる上に、何らかの形で血族的・地縁的結びつきも出来ていた。それ故、ある種の組織的行動をとることも可能であったのだろう。また、本稿では紙幅の関係上考察できなかったが、解放前や蜂起の最中における自由黒人の果たした役割も看過できない。さらに内容的にみると、デンマーク本国で1788年に実現した、土地緊縛制廃止 (stavnsbånds ophævelse),⁶⁹ 即ち土地に拘束されていた農民を解放して移動の自由を認めた出来事と比較した場合、西インドで実施された奴隷解放の方が移行期間も無い即時完全解放で、より急進的である。1833年に実現した英国領における奴隷解放と比較した場合も同様のことが言える。このように内容から見ても無条件の即時的かつ完全な解放なのであった。

最後に、奴隷解放を宣言したデンマーク領西インド総督ペーター・フォン・ショルテンのその後をみておきたい。フォン・ショルテンは奴隷解放を巡る逼迫した動きの中で幾度も大きな決断を下すことを強いられ、自分が思い描いていたよりもかなり早い時点での奴隷解放を余儀なくされた。このため、極度の緊張感から体調を崩していた上に、白人プランターから暴動と解放について咎められたことにより心身ともに衰弱状態に陥った。⁷⁰ それ故医者への勧めもあって、7月6日に彼は総督の職を辞し、サンクト・トーマス島の長官オクスホルム (F. Oxholm) を後継者に任命した。そして1848年7月14日（金）早朝、フォン・ショルテンはデンマークに向け、島を後にしたのであった。もう二度と島に戻ることはなかった。その後島では、軍法会議や調査委員会が開催され、奴隷解放の発端となった暴動に関する情報が収集された。フォン・ショルテンの帰国後も、彼が出した奴隷解放の布告が効力を失うことはなく、9月22日の王令によって再確認されている。⁷¹ 一方、デンマークに帰国したフォン・ショルテンは政府に報告書を提出したが、調査委員会の取り調べを受けることになった。さらに彼は国王からの最終判断を仰ぐ前に、軍事的準備や措置も行わずに奴隷解放を実施したという、適切な措置を怠ったことに対する訴訟を1849年になって国から起こされた。1851年2月5日に判決が下り、総督職を罷免された上に年金受給権を失った。納得のいかないフォン・ショルテンは最高裁に上告した。1853年には彼の主張が認められる判決が全会一致で下り、それを機に引退し、国家からの年金を受けることになっ

た。⁷² 結局、フォン・ショルテンの行なったことの正当さが証明されたのであった。そしてこれは当然の帰結でもあった。何故ならこの「奴隷解放」というシナリオは以前から国王も最終目標として承認しており、問題はそれを何時どのように実現するか タイミングだけであったからである。先にみたようにフォン・ショルテンの案より国王のプランの方が、移行期間が短い上に新生児を先行解放するなど、より急進的であった程である。また外部環境もフォン・ショルテンの奴隷解放宣言に有利に働いていた。英国は既に 1833 年には奴隷制を廃止していたし、1848 年には近隣のマルティニーク島で黒人達による革命が発生していて、奴隷達にその情報が伝わるのも時間の問題であった。デンマーク絶対王制の崩壊に遅れること数ヶ月で実施されたこのデンマーク領西インドにおける奴隷解放は、現在の人権感覚からするとアメリカにおける解放（1863 年）やブラジルにおける解放（1888 年）に先駆けて実施された、世界史的にも意義ある措置であった。しかしながら、その中心人物であったフォン・ショルテンに対する風当たりは強く、当時のデンマーク国内における評価には厳しいものがあった。⁷³ 彼は 1854 年 1 月 26 日に娘のいるドイツのアルトナでその生涯を終えた。死後数日して初めて、死亡記事が「祖国」紙に掲載された（1 月 30 日付）が、そこには「彼の死によって政府は年間 12,000 リースダーラ (rigsdaler) 節約できることになった」⁷⁴ ということが書かれていただけで、彼の業績等には全く触れていなかった。いずれにせよ、デンマーク領西インドにおける奴隷解放については、外部環境の急激な変化もさることながら、西インド領のことを熟知したフォン・ショルテンの目標を見据えた周到な準備と彼の情熱を伴った努力の積み重ねがあったため、1848 年 7 月という時点で実現したのである。彼の職を賭けた歴史的措置の意義を見過ごしてはならないだろう。

ペーター・フォン・ショルテンが亡くなったという知らせが西インドに伝わった時、解放された奴隷達は「ペーターの旦那が亡くなった (Massa Peter is dead)⁷⁵」といって彼の死を心から悼んだという。

注

- (1) 以後、本論文中でこの島のデンマーク時代（1672-1917年）に言及する際はデンマーク語読みで、サント・トマス島と表記する。
- (2) 以後、本論文中でこの島のデンマーク時代（1733-1917年）に言及する際はデンマーク語読みで、サント・クロイス島と表記する。
- (3) 以後、本論文中でこの島のデンマーク時代（1718-1917年）に言及する際はデンマーク語読みで、サント・ヤン（St. Jan）島と表記する。
- (4) 当時デンマークはアフリカの黄金海岸、奴隷海岸に要塞を中心とした貿易拠点、インド南部に貿易拠点トランケバル、カリカットを有し、さらにインド洋上のニコバル諸島を領有していた。また中国にも貿易の拠点を持っていた。
- (5) 以下の研究がある。拙稿「デンマーク奴隷貿易廃止」『IDUN（大阪外国語大学デンマーク語・スウェーデン語科）』第10号、1992年。；石本泰嗣「デンマーク領西インド諸島における黒人奴隷」『経済経営論叢（京都産業大学）』第32巻4号、1998年。；西出敬一「カリブ海デンマーク領諸島の黒人奴隷制」『アメリカス研究』第3号、1998年。
- (6) Neville A. T. Hall, *Slave Society in the Danish West Indies, Jamaica*, (The University of the West Indian Press), 1992, p.16.
- (7) Sv. E. Green-Pedersen, “The History of the Danish Negro Slave Trade 1733-1807”, *Revue française d'histoire d'outre-mer*, vol.62, 1975, p.203.
- (8) *Ibid.*, p.201 (Table 3).
- (9) W. E. Minchinton and P. C. Emmer, “The Atlantic Slave Trade: New Approaches. An Introduction”, *Revue française d'histoire d'outre-mer*, vol.62, 1975, p.12.
- (10) *Ibid.*
- (11) Green-Pedersen, *op. cit.*, p.198.
- (12) 例えば1846年ではその割合が農業奴隷＝70%, 職人奴隷＝6%, 家内奴隷＝5%, 非生産奴隷＝19%である。Hans Chr. Johansen, “Slave Demography of the Danish West Indian Islands”, George F. Tyson, (ed.), *Bondmen and Freedmen in the Danish West Indies - Scholarly Perspectives* -, U.S. Virgin Islands, (The Virgin Islands Humanities Council), 1996, p.73.
- (13) 例えば奴隷主は黒人奴隷の売買権を有すること、奴隷の結婚には奴隷主の同意が必要であること、奴隷主が自分の所有する老人と子どもを適切に扱うという規定に違反する場合、奴隷の所有権が国王に帰属することになる等。Isaak Dookhan, *A History of the Virgin Islands of the United States*, Jamaica (Canoe Press), 1995, p.155.

- (14) 法的には 1683 年に制定された「デンマーク法 (Danske Lov)」がデンマーク領西インドにも及んでいたが、これは対象が白人のみであった。黒人奴隷は白人の私的所有物として扱われており、その範疇でしか保護されなかった。
- (15) 厳密に言えば、自由黒人には奴隷の母親と白人の父親から生まれた混血児である (free-colored) と元々奴隷であった者が金で自由を買い取った (free-black) がいた。この両者は社会の中で似たような中間層を形成していた。なお、奴隷は基本的には母親の身分を継承した。当時デンマーク領西インドにいた白人は、基本的には家族を本国に残してることが多く、単身赴任中に関係を持った黒人女性との間に子供が産まれることもごく普通のことであった。そしてその子供は母親から身分を引き継ぐ為、奴隷身分であったが、白人の父親がその子供の自由身分を買い取ることが頻繁にみられた。Dookhan, *op.cit.*, p.143.
- (16) 委員会の設置およびその後の活動については次のものが詳しい。ザバヌー・ギッフオード (徳島達朗監訳) 『アボリシヨニズムの社会史—反奴隷制運動とクラークソン—』梓出版, 1999 年, 22 頁以降。
- (17) この勅令については、拙稿「デンマークの奴隷貿易廃止」203-04 頁を参照。
- (18) 赤羽親衛隊 (de røde fjer) については次のものを参照。E. O. A. Heedegaard, *Frederik VI og de røde fjer*, I-II, København (以下, K.と略), 1975.
- (19) 国王フレデリック 6 世もフォン・ショルテンに全幅の信頼を置いていた。そして、多くの事柄がその二人の間で交わされた私信で決定されていた。Carlo Christensen, *Peter von Scholten – A Chapter of the History of the Virgin Islands –*, Lemvig, (Gadgaard Nielsens Bogtrykkeri), 1955, p.15 & p.17.; Birgit Julie Fryd Johansen, *Slave Schools in the Danish West Indies 1839-1853*, Speciale (Thesis), The University of Copenhagen (Historical Institute), 1988, p.10.
- (20) Neville A. T. Hall, “Anna Heegaard -Enigma-”, George Tyson (ed.), *Bondmen and Freedmen in the Danish West Indies – Scholarly Perspectives –*, U.S. Virgin Islands, (The Virgin Islands Humanities Council), 1996, p.173.; Svend Einar Holsoe, “A View of the Emancipation Rebellion on St. Croix -150 Years Later-”, Per Nielsen (red.), *Fra slaveri til frihed – Det dansk-vestindiske slavesamfund 1672-1848*, K. (Nationalmuseet), 2001, s.116. また、彼の黒人に対する寛容な態度も、彼の愛人が Anna Heegaard という自由黒人であったからだとする説もある。cf. Neville A. T. Hall, “Anna Heegaard -Enigma-”, p.170ff.
- (21) H. F. Garde, “Anna Heegaard og Peter von Scholten”, *Personalthistorisk Tidsskrift* 78, 1958, s.28.
- (22) 15 歳以上の子供及び最近渡来した外国生まれの自由黒人も 3 年間の待機期

間が必要であった。

- (23) 当初は混乱がみられたが、時間の経過と共に慣れが生まれた。1840 年代にはかなり改善されている。cf. Neville A. T. Hall, *Slave Society in the Danish West Indies*, p.177.
- (24) この中央委員会は 1834 年 3 月 4 日の勅裁書により設置され、メンバーはフォン・ショルテン以下次の通り。Frederik von Löazow, A.S. Ørsted, Nicolaj Holten, Michel Lange, Wilhelm Johansen, Peter Thoning. Johansen, *op. cit.*, p.17.
- (25) 絶対王制下、国王が特別な人物や機関に与えた命令文書。勅令は内容が一般的な事項に関わっているのに対して、勅裁書は特別なことに関わるが多い。
- (26) 例えば鞭打ちの体罰は男子で最高 12 回、女子で 6 回に制限された。H. Lawaetz, *Peter von Scholten*, K. 1940, s.150.
- (27) 1840 年になって初めて 1840 年 5 月 1 日勅令として公布された。Cf. Ny Collegialtiderne Nr.23 (1840).
- (28) この奴隷学校及びその創設については次のものを参照。Johansen, *op. cit.*, ss.10-31.; Eva Lawaetz, “Negerskoler i Dansk Vestindien”, *Handels- og Søfartsmuseets Årbog*, 1981, ss.169-183.
- (29) デンマーク本国では既に 1814 年にいわゆる「学校令」が出され、一般義務教育が導入されていた。
- (30) 勅裁書は、プランターの所有物である奴隷子弟を学校に出席させる上に学校の建設費等の負担をプランターに求めている為、フォン・ショルテンは負担の増えるプランターとの関係悪化を恐れ、既述のようにこの条項をすぐに公表はしなかった。
- (31) 構成メンバーは次の通りであった。役人 2 人、聖職者 3 人、市民代表 3 人、プランター 11 人。詳細に関しては、Johansen, *op. cit.*, pp.14-15.を参照。
- (32) この学校令公布の日付に関しては幾つかの説がある。Johansen (p.19) が指摘するように、これまでの研究の大半が史料名を示していない。Hornby (*Kolonierne i Vestindien*, K. Politikens Forlag, 1980, s.248) や Hall (*Slave Society in the Danish West Indies*, p.198) などは日付を明示せず「1839 年の学校令」とし、Eva Lawaetz (s.178) 及び Dookhan (p.195) は 6 月 4 日としている。
- (33) 1839-46 年の間に学校が順次完成した。1841 年 5 月 16 日には最初の学校、The Great Princess school が創立された。これは 1981 年現在未だ学校として使用されている。Eva Lawaetz, *op. cit.*, s.179.
- (34) フスの流れをくむキリスト教団体で、一時衰退の後 18 世紀前半に、ドイツのルター派敬虔主義者であったツィンツェンドルフ (Ludvig von Zinzendorf)

伯爵によって再興された。聖書に重点を置く彼らは伝統的に教育にも熱心であった。海外伝道に力を入れ、その布教活動はアメリカ、西インド、グリーンランドにまで及んだ。

- (35) 「そのような（黒人のための学校を創るという）適切なあなたの企てにお祝いを述べることは私の大きな喜びです。…もし今後もその学校について進展具合を知らせ頂ければ、大変嬉しいです。このことは私の大きな関心事なのです。」 Christensen, *op.cit.*, p.16.
- (36) フォン・ショルテンは後に(1849年), 自分の弁護士リーベンベア (Libenberg) に宛てた書簡の中で次のように述べている。「私は突然の奴隷解放宣言を支持したことは一度もなかった。反対に, 黒人達を自由な状態に適応させる為に解放が段階的に準備されるべきだ, と私が思っていたことは, 総督としての私の全仕事で証明している。」 Harold W. J. Willocks, *The Umbilical Cord – The History of the United States Virgin Islands from Pre-Columbian Era to the Present-*, St. Croix, 1995, p.176.
- (37) Hornby, *op. cit.*, s.246. 場合によっては公権で奴隷を保護する場合もあった。
- (38) 以下の島ごとの交渉に関する記述は, H. Lawaetz, *op. cit.*, ss.155-56.に依拠している。
- (39) H. Lawaetz, *op. cit.*, s.156. また5回シリーズで「祖国」紙に掲載された「プランターから見た西インドについて」という記事中でもフォン・ショルテンが厳しく批判されていた。
- (40) H. Lawaetz, *op. cit.*, s.157.
- (41) ヨーロッパに自由主義が広まる中で, 国王フレデリック6世による「上から」の措置として実現したもので, 1835-36年にかけてデンマーク本土(ロスキレとヴィボーの2ヶ所)及びデンマーク公爵領スレースヴィ, ドイツ公爵領ホルシュタインの計4ヶ所で議会が開催された。議会設置の詳細については, 拙稿「19世紀デンマークにおける地方身分制議会設置令について」『北海道東海大学紀要人文社会科学系』第7号, 1994年, 55-68頁を参照。
- (42) 彼らは奴隷解放委員会 (Commiteen for negerslavernes frigivelse) のメンバーであった。
- (43) この考えは既にフォン・ショルテンに宛てた1843年5月11日付の書簡に見られる。 Cf. Christensen, *op. cit.*, p.18.
- (44) Willocks, *op. cit.*, p.166.
- (45) Christensen, *op. cit.*, p.19.
- (46) Willocks, *op. cit.*, p.166.
- (47) H. Lawaetz, *op. cit.*, s.167.

- (48) Chri stensen, *op. cit.*, p.20.
- (49) *Ibid*
- (50) この一報がデンマーク領西インドに届いたのは 2 月末になってからであった。
- (51) この報は 5 月末にデンマーク領西インドに到着した。なお、シュレースヴィヒ・ホルシュタイン軍はプロイセンの援助を受けていた。
- (52) フランス本国の新政府は奴隷の即時解放を決定したが、その知らせが届く前にこの暴動が発生したのである。なお、これらフランス領における暴動では黒人によって白人が殺害されている。
- (53) これに対してフォン・ショルテンはデンマーク領においては現在奴隷達は静かで落ち着いており、暴力行為もみられない旨述べたうえで、儀礼上、配慮の礼を述べている。Willocks, *op. cit.*, s.170.
- (54) Cf. Svend E. Holsoe, “The 1848 Emancipation Rebellion”, Geroge Tyson (ed.), *Bondmen and Freedmen in the Danish West Indies – Scholarly Perspectives –*, U.S. Virgin Islands, (The Virgin Islands Humanities Council), 1996, pp.160-169. 白人プランターの間にもこの暴動の予兆が情報として入ってはいたが、これまでの関係が比較的良好であった為、「単なる噂」とされた。Dookhan, *op. cit.*, p.175.
- (55) Svend Einar Holsoe, “A View of the Emancipation Rebellion on St. Croix -150 Years Later-”, s.123. なお、当時のサント・クロイス島における奴隷人口（1846 年で 16,706 人）を考えると、島の西部に住む奴隷の大半がフレデリックステズに集まっていたことになる。
- (56) Willocks, *op. cit.*, p.173.
- (57) Frederik von Scholten, “Narrative of the 1848 Rebellion on St. Croix”, George F Tyson and Arnold R. Highfield, *The Kamina Folk – Slavery and Slave Life in the Danish West Indies –*, U.S. Virgin Islands, (The Virgin Islands Humanities Council), 1994, p.221.
- (58) *Ibid*
- (59) H. Lawaetz, *op. cit.*, s.176.
- (60) *Ibid* s.177.
- (61) H. Lawaetz, *op. cit.*, s.177.
- (62) *Ibid*, s.182.
- (63) 史料は次のものを参照した。Hornby, *op. cit.*, s.258.
- (64) 最初の労働法は解放後約 3 週間経った 7 月 29 日に出され、さらに整備されたものが 1849 年 1 月 26 日に公布された。

- (65) John P. Knox, “Historical Account of the 1848 Rebellion”, George F. Tyson and Arnold R. Highfield, *The Kamina Folk – Slavery and Slave Life in the Danish West Indies* –, U.S. Virgin Islands, (The Virgin Islands Humanities Council), 1994, p.229.; Holsoe, *op. cit.*, ss.122-23.
- (66) H. Lawaetz, *op. cit.*, s.186.; Christensen, *op. cit.*, p.26.
- (67) Hall, *op. cit.*, p. 208. 数人の黒人が犠牲になったが、白人の犠牲は皆無であった。Hornby, *op. cit.*, s.261.
- (68) 数人いたリーダーの一人がブッド将軍 (General Buddo) だったと言われている。Cf. Hornby, *op. cit.*, ss.256-57.; Dookhan, *op. cit.*, p.178.
- (69) これに関しては、拙稿「デンマークの土地緊縛制廃止 (1788)」『汎バルト海・スカンジナビア国際学会誌』第1号, 1991年, 参照。
- (70) 卒中 (apoplexi) の症状を示した。H. Lawaetz, *op.cit.*, s.187.
- (71) Christensen, *op. cit.*, pp.30-31.
- (72) H. Lawaetz, *op. cit.*, ss.213-14.
- (73) しかし、彼はデンマーク領西インドでは黒人達に親しまれており、1848年の秋には早くも彼を総督として島に戻して欲しいという嘆願書が国王宛に出されたほどである。Christensen, *op. cit.*, p.30.
- (74) Hornby, *op. cit.*, s.261.
- (75) Christensen, *op. cit.*, p.32.

(付記)

本稿は 2000 年度松前重義記念基金北海道東海大学研究教育振興基金による研究成果の一部です。記して謝意といたします。

The Emancipation of Negro-Slaves in the Danish West Indian Colonies in 1848

Yoshikazu SAHO

Summary

The purpose of this article is to clarify the emancipation process of Negro-slaves in the Danish West Indian colonies; St. Croix, St. Thomas, St. Jan, which constitute U.S. Virgin Islands today.

During the reign of Christian IV, Denmark set its course outward to encourage mercantilism. As a result, they obtained trading posts in Africa, India, China, and even the West Indies. The Danes developed triangular trade and they transported the African Negro slaves to the Danish West Indies. They developed sugar plantations mainly on St. Croix. In 1770 there were 25,524 slaves and 2,061 whites on the island. But in 1792 the Danish government issued a royal decree that banned the slave trade in the Danish colonies from 1803. This brought the reputation for being the first country in the world to declare such a measure. But still, slavery was surviving strongly in the Danish West Indies.

Then came Peter von Scholten. He had the warm heart to understand the Negro-slaves and became acting Governor General in 1827. His final goal was to emancipate all the Negro-slaves, but he thought the gradual process was most important to realize his goal. By using personal intimacy with the King, von Scholten negotiated with the central government and obtained the following results. (1) Royal Decree of 1834-04-18, which gave the free Negro the equal law status with whites. (2) Royal rescript of 1834-11-24, that approved the rights of the slaves; such as buying their freedom, changing the owner, and possessorship etc. (3) Establishing compulsory slave schools in 1839. Von Scholten put high importance on education. He believed that one should have education before being emancipated to be able to decide for oneself in the future. And in 1843 the slaves got Saturday free during the non-harvest season. Gradually the life of the slaves got better. Moreover in 1847, a Danish royal rescript promised freedom for all slaves in twelve years and in the meantime gave freedom for children at birth from July 28th 1847. This paternalistic measure aroused the dissatisfaction among the adult slaves, slogan being “our children free, but we slaves...”. Expectations rose faster than the change provided, resulting in an increased degree of anger and frustration. And this led to the rebellion of

1848 on St.Croix.

In the night of July 2nd, the ringing of estate bells and blowing of the conch shells started. And the slaves began to assemble in front of the Frederiksfort in Frederiksted. They demanded freedom. The number of slaves protesting grew to around 8,000 the next day. After receiving some information that gave the real situation in Frederiksted, von Scholten decided to go over. Seeing the situation, as soon as he arrived at the Frederiksfort, he proclaimed to the slaves, "Now you are free. You are hereby emancipated". With these words, slavery in the Danish West Indies ceased to exist and the slaves became free.

This long cherished dream of the emancipation became realized so abruptly that von Scholten wasn't really ready for it. For days von Scholten had driven himself physically and finally he collapsed mentally. He resigned and went back to Denmark, never to return to his favorite islands. In Denmark there was a judicial action against him, because he could have prevented the situation by taking the necessary measures. Finally, he won the suit and got his pension. He died in 1854 in Altona, but his historic deed of giving freedom to the Negro-slaves in Danish West Indies was not highly valued at that time. Without him such a bloodless emancipation could not have been realized in so short a time. His efforts and achievement should not be neglected.

参 考 文 献

（外国文献の発行地は特記のない限り København）

主 要 史 料

Vestindiske og guineiske Sager, Generaltoldkammerets Arkiv, Rigsarkivet (København).
Diverse Sager, Generalguvernøren, Vestindisk Lokalarkiv, Rigsarkivet (København).
Schou, J.H. m.fl.: Chronologisk Register over de Kongelige Forordninger Bd.21-24, 1835-48.

主 要 文 献

Borgen, Palle Petersen: *Danskernes Slaver (Bygget over Paul Iserts breve fra Guldkysten og Dansk Vestindien 1783-1788)*, Borgen, 1983.
Carstens, J.L. (English edition and translation by Arnold R. Highfield): *J.L. Carstens' St. Thomas in the Early Danish Times -A General Description of all the Danish, American or West Indian Islands*, U.S. Virgin Islands, (The Virgin Islands Humanities Council), 1997.
Christensen, Carlo: *Peter von Scholten -A Chapter of the History of the Virgin Islands-*, Lemvig, (Gadgaard Nielsens Bogtrykkeri), 1955.
Dookhan, Isaac: *A History of the Virgin Islands of the United States*, Jamaica, (Canoe Press), 1995.
Garde, H. F., “Anna Heegaard og Peter von Scholten”, *Personallistorisk Tidsskrift* 78, 1958.
ザバヌー・ギッフオード（徳島達朗監訳）『アボリシヨニズムの社会史—反奴隷制運動とクラークソン—』梓出版，1999年。
Gjessing, Frederik C. and William P. Maclean: *Historic Buildings of St. Thomas and St. John*, London, (Macmillan), 1987.
Green-Pedersen, Sv. E.: “The History of the Danish Negro Slave Trade 1733-1807”, *Revue française d'histoire d'outre-mer*, vol.62, 1975.
Gøbel, Erik: “Dansk sejlads på Vestindien og Guinea 1671-1807”, *Handels- og Søfartsmuseets Årbog*, 1982.
Gøbel, Erik: “Volume and Structure of Danish Shipping to the Caribbean and Guinea, 1671-1838”, *International Journal of Maritime History* 2, 1990.
Haagensen, Reimert (English edition and translation Arnold Highfield) : *Description of*

- the Island of St. Croix in America in the West Indies*, U.S. Virgin Islands, (The Virgin Islands Humanities Council), 1995.
- Hall, Neville A. T.: *Slave Society in the Danish West Indies*, Jamaica, (The University of the West Indian Press), 1992.
- Hansen, Axel C.: *From these Shores*, Tennessee, (Hansen and Francois), 1996.
- Highfield, Arnold R. and George F. Tyson: *Slavery in the Danish West Indies - A Bibliography* -, US Virgin Islands (The Virgin Islands Humanities Council), 1994.
- Hornby, Ove: *Kolonierne i Vestindien*, (Politikens Forlag), 1980.
- 石本泰嗣「デンマーク領西インド諸島における黒人奴隷」『経済経営論叢（京都産業大学）』第32巻4号，1998年．
- Jensen, Peter Hoxcer: *From Serfdom to Fireburn and Strike - The History of Black labor in the Danish West Indies 1848-1916*, St. Croix, (Antilles Press), 1998.
- Johansen, Birgit Julie Fryd: *Slave Schools in the Danish West Indies 1839-1853*, Speciale (Thesis), The University of Copenhagen (Historical Institute), 1988.
- Knight, David W. & Laurette de T. Prime (Translation of the Danish text by Gary T. Horlacher): *St. Thomas 1803 – Crossroads of the Diaspora (The 1803 Proceedings and Register of the Free Colored)* –, St. Thomas, (Little Nordside Press), 1999.
- Larsen, Kay: *Dansk Vestindien 1666-1917*, (C.A. Reitzels Forlag), 1928.
- Larsen, Leif Calundan: “Kolonisationen af St. Jan. I begyndelsen af 1700-tallet”, 1066, 10 årgang, 1980.
- Lawaetz, Erik J. (ed.): *EMANCIPATION – The Virgin Islands of the United States celebrates its 150 Year Anniversary 1848. July 3. 1998*, Edition Poul Kristensen, 1998. ISBN: 87-7851-082-1
- Lawaetz, Eva: “Negerskoler i Dansk Vestindien”, *Handels- og Søfartsmuseets Årbog*, 1981.
- Lawaetz, H: *Peter von Scholten*, (Gyldendalske Boghandel Nordisk Forlag), 1940.
- Leary, Paul M.: *United States Virgin Islands Major Political Documents 1671-1991*, U.S. Virgin Islands, (University of Virgin Islands), 1992.
- Minchinton, W.E. and P.C. Emmer: “The Atlantic Slave Trade: New Approaches. An Introduction”, *Revue française d'histoire d'outre-mer*, vol.62, 1975.
- Nielsen, Per (red.): *Fra slaveri til frihed – Det dansk-vestindiske slavesamfund 1672-1848*, (Nationalmuseet), 2001.
- 西出敬一「カリブ海デンマーク領諸島の黒人奴隷制」『アメリカス研究』第3号，1998年．
- Olsen, Poul Erik: *Toldvæsenet i Dansk Vestindien 1672-1917*, (Toldhistorisk Selskab),

1988.

Olwig, Karen Fog: *Vestindierne – fra dansk slaveri til amerikansk masse-turisme* –, Holte, (Skarv), 1980.

Paiewonsky, Isador: *Eyewitness Accounts of Slavery in the Danish West Indies – also Graphic Tales of Other Slave Happenings on Ships and Plantations* –, New York, (Fordham University Press), 1989.

佐保吉一「デンマーク奴隷貿易廃止」『IDUN（大阪外国語大学デンマーク語・スウェーデン語科）』第10号，1992年．

Schackinger, Johan David: *Tragedy in the West Indies*, Greasted, (Facet), 1998.

The 1688 Census of the Danish West Indies (Portrait of a Colony in Crisis), (Translated by Gary T. Horlacher, Edited and Annotated by David W. Knight), St. Thomas (Little Nordside Press), 1998.

Trier, C.A.: “Det danske-vestindiske Negerindførselsforbud af 1792”, *Historisk Tidsskrift*, rk.7, Bind 5, 1904-05.

Tyson, George F. (ed.): *Bondmen and Freedmen in the Danish West Indies – Scholarly Perspectives* –, U.S. Virgin Islands, (Virgin Islands Humanities Council), 1996.

Tyson, George F. & Arnold R. Highfield: *The Kamina Folk – Slavery and Slave Life in the Danish West Indies* –, U.S. Virgin Islands (The Virgin Islands Humanities Council), 1994.

Tyson, George F. & Arnold R. Highfield: *The Danish West Indian Slave Trade – Virgin Islands Perspectives* –, U.S. Virgin Islands, (The Virgin Islands Humanities Council), 1998.

Vibæk, Jens: *Dansk Vestindien 1755-1848*. (Red.): Johannes Brøndsted; Vore gamle tropekolonier. 2.udg. bd.2, 1966.

Westergaard, Waldemar: *The Danish West Indies Under Company Rule (1671-1754)*, with a Supplementary Chapter, (1755-1917) New York, 1917.

Willocks, Harold W.L.: *The Umbilical Cord – the History of the United States Virgin Islands from Pre-Columbian Era to the Present* –, St. Croix, 1995. ISBN: 1-891013-01-7.